

「沈黙の時間」

銀賞

福岡県福岡市 加藤 淳史

何度も通う喫茶店なのに、その日はなぜか店主の後ろの壁に掛けられた一枚の写真に目が止まった。

腰の曲がった老人が肩から背中にかけて、とても重そうな麻袋を担いで歩いている日常の風景なのだが、そのモノクロの写真から目が離せなくなっていた。

どこから運んできたのだろう。どこまで運んで行くのだろう。

珈琲豆を挽くミルのモーター音が止み、店は静けさを取り戻した。店主が無言でネルドリッパを「パンっ」と叩く音で私の視線は店主の優雅な動きに移った。

抽出が終わるまでの間、店主には話しかけないようにしている。これまでもそうしてきた。

再び写真に目を移して夢想にふけっていると、私の前に珈琲が出された。香りを楽しみ一口すすってから店主にその写真のことを尋ねた。

この老人は珈琲農家で街まで珈琲豆を売りに来ていたそうだ。袋の重さは60kgくらいはあるだろうと言う。エチオピアに視察に行った時に撮ったそうだ。カメラをとっさに持ち、老人の気迫に押

されながらもシャッターを切ったらしく、ピンぼけなのかブレているのか、職業カメラマンの私から見ると詰め甘い写真だった。

しかし、この写真には老人の生き様が写っている。だから私は目を奪われたのだと思う。

写真を見ながら珈琲を味わっていると新たな注文が入った。

店主は穏やかな表情でキャニスターから珈琲豆を木製の小皿に丁寧に取り、さらに豆を選び分けると再びミルのモーター音が響く。

「パンっ」と音が鳴り、挽きたての珈琲豆に湯が注がれると珈琲豆はみるみる膨れ上った。

それを見つめる店主の顔を見ると、穏やかで嬉しそうだ。

あの老人の生き様を間近で感じてきた店主はこの時間、あの老人を対話しているのかもしれないと感じた。

この時間を邪魔しないために、抽出が終るまでの間、私は沈黙になる。

彼が淹れてくれる沈黙の時間を私も大切にしたい。

